

東京都立大学 学士課程教育

「卒業の認定に関する方針」及び「教育課程の編成及び実施に関する方針」

プログラムの名称: 人文社会学部 人間社会学科

.1.卒業の認定に関する方針 (ディプロマ・ポリシー:DP)

..(1)取得できる学位

〈社会学教室〉

学士 (社会学)

〈社会人類学教室〉

学士 (社会人類学)

〈社会福祉学教室〉

学士 (社会福祉学)

〈心理学教室〉

学士 (心理学)

〈教育学教室〉

学士 (教育学)

〈言語科学教室〉

学士 (言語学)

〈日本語教育学教室〉

学士 (日本語教育学)

..(2)取得できる資格

定められた教職及び教科に関する科目の単位修得ならびに卒業を要件として、中学校教諭一種免許状・高等学校教諭一種免許状を取得することが可能です。また学芸員、社会教育主事の資格についても定められた科目の単位修得と卒業を条件に取得することもできます (なお、本学在学生在が教職の資格を取得しようとする場合には、必ず入学年度発行の「教職課程の履修概要」を熟読参照してください)。

このほかに、定められた課程を修めることで、社会調査士 (社会学教室、社会人類学教室、社会福祉学教室)、社会福祉主事 (社会福祉学教室)、児童指導員 (社会福祉学教室、心理学教室)、認定心理士 (心理学教室) の資格を取得することもできます。社会福祉士受験資格、児童厚生委員受験資格 (心理学教室) を得ることもできます。公認心理師受験資格 (心理学教室) を得ることもできます (但し、大学院進学等が必要)。

〈社会学教室〉

社会調査士

〈社会人類学教室〉

中学校教諭一種免許状（社会）、高等学校教諭一種免許状（公民）、学芸員
〈社会福祉学教室〉

社会福祉主事、児童指導員、社会福祉士

〈心理学教室〉

中学校教諭一種免許状（社会）、高等学校教諭一種免許状（公民）、認定心理士、児童指導員、公認心理師受験資格（大学院進学等が必要）、児童厚生委員の受験資格

〈教育学教室〉

中学校教諭一種免許状（社会）、高等学校教諭一種免許状（公民）、学芸員、社会教育主事（社会教育士）

〈言語科学教室〉

・該当なし

〈日本語教育学教室〉

中学校教諭一種免許状（国語）、高等学校教諭一種免許状（国語）

..(3)育成する人材像

人間社会学科では、現代社会で求められている、人間が育む多様な価値観に対する寛容な態度、徹底的な現場主義の姿勢、確かな情報収集能力と批判的思考力をあわせもち、現代社会が抱える様々な諸問題にむきあうことができる学生を育成します。

卒業後の進路は、一般企業（出版・教育・コンピュータ・サービス業ほか）、官公庁（国・都道府県・市町村）、病院、社会福祉協議会、福祉施設、教員、言語療法士、通訳、大学院進学などがあり、卒業生は各分野で活躍しています。

..(4)プログラムの特色

人間社会学科では、急激に変化する現代社会や大都市において発生しているさまざまな現象や課題について、理論的かつ実践的に学ぶことができます。人間と社会について考えていくための基礎となる社会、心理、教育、言語の視点から7つの教室を設け、総合的な知識を深めるとともに、それぞれの専門分野での学問的探求を行っています。以下、分野ごとに特色を紹介します。

〈社会学教室〉

社会学教室では、社会学の基礎概念と諸理論を踏まえ、現代社会や都市の抱える諸問題をネットワーク構造論、サブカルチャー論、ジェンダー論、コミュニティ論、エスニシティ論、社会階層論など多様な視点から学ぶことができます。また社会調査方法論を踏まえた現地調査を体験することができます。

学位方針に準拠し、2年次では学生一人ひとりが自らの主題を的確に設定できるよう必修の「社会学原論」と「社会学基礎演習」を置きます。3,4年次では学生一人ひとりが

関心に合わせて学修を進められるよう多様な社会科学的主題、方法、思想を学べる演習科目群と特殊講義科目群を置きます。なお学修の進捗が早い学生にも適切に対応するため、これらも2年次から履修可能にします。

〈社会人類学教室〉

社会人類学教室では、世界の社会や文化の見方に関する基本概念を学びながら、特にアジア・アフリカ・オセアニア・アメリカの諸民族の環境・政治・経済・社会・文化の特色を理解し、それをグローバル化している世界の文脈に位置づけて理解します。これにより世界各地の社会・文化に見られる生活や価値観の多様性や創造性、あるいは混ぜこぜの生活スタイルなどを世界比較の視野から捉え、過去・現在・未来にわたる人類のあり方を学ぶことができます。

2年次では基礎的な理論やスタディスキルを学び、3年次ではより高度な理論や学問的視角を特殊講義（2年次生も履修可）において学びます。同時に3年次では、英文テキストや専門書を用いた高度な演習に参加するほか、国内での調査実習（選択制）も実体験します。そして、4年次での卒業論文の執筆は、必要に応じてフィールドワークを実施しつつ、すべての知識や経験を集約させる機会となります。

〈社会福祉学教室〉

社会福祉学教室では、経済のグローバリゼーションや情報化、少子高齢社会の到来等による生活環境の変化を理解し、何が社会福祉問題なのかを明らかにしつつ、それに対応する社会福祉学全般の制度・政策や方法等を学びます。また、希望すれば社会福祉施設や機関での現場実習を体験することができます。学生の関心や進路に応じたさまざまな科目の選択履修が可能です。

〈心理学教室〉

心理学は、人間の意識や行動について、実験、観察、調査、検査といった実証的な手法を用いて研究する分野です。事物を知覚する能力や考える力、個人が社会生活を営む上で生じる様々な現象、生涯を通じた人の心理社会的な変化、精神的な問題の理解やそれに悩む個人や家族への支援などについて、様々な実習を通じて学び、人間を深く理解することを目指します。心理学も、人の心を深く知り、理解することが大切です。そのためには人に興味があるだけでなく、社会や文化、環境に関する関心を持ち、広い視野で物事を考えることが必要です。柔軟な思考と、新鮮な問題意識を持ち、行動力のある人。人と接することが好きで、人の役に立ちたいと思っている人。人についてもっと深く探究したいと思っている人。ぜひ本コースでその知的探究心を満たしてください。卒業後の進路は、大学院進学、公務員（心理職・一般職）、一般企業（出版・教育・コンピュータ・サービス業）などがあります。

心理学分野では、2・3年次における心理学の基礎および実験・実習などを通じて、心理学を研究する上で必要な知識と方法論、研究スキル（各種調査や分析手法など）について学びます。3・4年次では自分の研究テーマを絞り、担当教員の指導のもと、卒業

論文に向けて学びを深めていきます。また、公認心理師受験希望の場合は、卒業までに規定の単位を取得し、大学院に進学する必要があります。

〈教育学教室〉

教育学では、教育実践と向き合いながら、人間の成長に関わる諸科学を統合し、乳幼児から成人までの発達と学習、それを支える学校など諸制度のあり方を考えます。教育政策・制度、教育社会学、学校教育、青年期の学校と社会、教育哲学、社会的養護、矯正教育、保育・幼児教育、多文化教育、社会教育、障害者教育など、多彩な講義や演習を用意しています。そして何よりも学生が自律した学習者として3年間をかけて『自分のテーマ』を見つけ、追究していくことを重視します。卒業後の進路は、一般企業、官公庁（国・都道府県・市町村）、教員、大学院進学などです。

2年次では、教育学入門や複数の講義科目を通して、幅広い教育学の知識やスタディスキルを修得します。3年次では、演習を中心に各自のテーマを探索し、ゼミ生同士の深い討論を通して課題を練り上げます。4年次には、自分のテーマを明確にし、卒業論文として追究します。

〈言語科学教室〉

赤ちゃんはどのようにして母語を身につけていくのでしょうか。外国語はどのようにして難しいのでしょうか。ことばは人間だけのものなのでしょうか。動物もことばを話すのでしょうか。これらを明らかにするために、言語科学ではことばを科学的に探究します。言語の仕組みについての理論的研究と、行動実験や脳の機能の計測などの先端的研究に取り組んでいます。また、初歩から高度な専門知識と技能へ至るためのカリキュラムが整備されており、そのための設備も充実しています。文系においてこれらのことが本格的に学べるのは、本学の言語科学だけです。文系・理系を問わず、新しいことに挑戦したい学生諸君を歓迎します。卒業後の進路は、大学院進学、公務員、教職(中学、高等学校、専門学校)、一般企業（翻訳、出版、教育、コンピュータ関係、病院などの医療機関の研究スタッフ）などです。

2・3年次に、理論言語学および認知神経科学の基本的な知識を身につけます。理論言語学の分野の演習では複数の言語を横断的に観察・分析し、その背後にある普遍的なメカニズムと個別言語の特徴を見いだすことによって、科学的思考法を身につけます。認知神経科学の分野では、演習を通して脳機能計測の意義と方法論、統計学、プログラミングなどを学び、データを解析的に検討できるようにしていきます。3・4年次では、演習科目を中心とした授業で、国内外の学術論文による文献研究能力を養います。言語理論／認知神経科学に関して、一つの研究プロジェクトを遂行する訓練を行います。

〈日本語教育学教室〉

日本語教育学では日本語をはじめとする言語力全般を養成します。日本語を、母語としても、外国語としても深く理解し、異文化の人々との日本語によるコミュニケーションを指導・促進する力を養成します。また、言語学的な知識ばかりでなく、言語教育学・

社会と言語とのかかわり・異文化コミュニケーション論・教育工学の基礎を習得します。日本語と日本文化を他言語・他地域との対照において深く理解し、それをグローバル社会の中で伝達していく言語力を身につけます。人々の移動が増えていく社会的現実の中で、言語教育やそれを取り巻く環境を理解し、対応・行動していける人材を養成していきます。卒業後の進路は教員、海外の日本語教育専門家、非営利団体（NPO）、教育・文化に関する出版社、その他一般企業、大学院進学などです。

日本語教育学では、まず、2年次に日本語教育学の基礎となる日本語教育学概論、日本語学概論、日本言語学概論、日本社会言語学概論、日本語習得論概論を履修してください。その上で、日本語表現法やコミュニケーション論、日本の社会と文化を客観的に分析する講義と演習、教育工学的な手法による言語教育、言語調査、教育実習など多彩な科目を履修することになります。

..

(5)獲得すべき学修成果

人間社会学科の学生は、卒業（学士の学位の授与）までにそれぞれ専攻する分野の学修を通じて、各分野固有の知識・理解及び技術とともに、普遍的に有効性を持つ能力として以下の学習成果を獲得すべきものとします。

①分野固有の知識・理解及び技術

教室ごとの固有な知識・理解及び技術は以下のとおりです。

〈社会学教室〉

社会学の基礎概念と諸理論を踏まえ、現代社会や都市の抱える諸問題を、サブカルチャー論、ジェンダー論、コミュニティ論、エスニシティ論、社会階層論など多様な視点から考察する能力を獲得する。

〈社会人類学教室〉

社会人類学の理論と方法論を踏まえ、世界各地の諸民族の環境・政治・経済・社会・文化の特色を理解し、それをグローバル世界の文脈において理解する能力を獲得する。生活様式や価値観の多様性や創造性を世界的な比較的視野からとらえ、過去・現在・未来にわたる人類のあり方を考察する能力を獲得する。

〈社会福祉学教室〉

社会福祉学の専門的知識をふまえて、社会福祉問題を生活に密着して総合的に把握し、能動的に学習する姿勢を培う。社会保障・社会福祉の政策理念・方法・制度・歴史等の諸科目を通して論理的思考力をつけ、同時に生活問題・ニーズを抱える人びとを支援する仕組みを実習等を通して学び、コミュニケーション能力や情報活用能力を獲得する。

〈心理学教室〉

実験心理学、認知心理学、社会心理学、発達心理学、計量心理学、臨床心理学など、心理学の理論と方法論をふまえて、人間の心理や行動に関わる諸側面について、分析的、統

合的に考える能力を獲得し、環境への適応に関わる諸問題の理解、解決に役立てるための能力の習得をはかる。

〈教育学教室〉

幅広い講義・演習等での集団的な学びを通して、教育学における教育行政、教育社会学、学校教育、青年期の学校と社会、教育哲学、社会的養護、矯正教育、保育・幼児教育、多文化教育、社会教育、障害者教育の理論と方法を獲得する。現代の教育課題に幅広く関心を持ち、その実態を的確に把握し、その解決に向けて実践的かつ理論的に取り組むことの出来る思考力や課題解決力を獲得する。

〈言語科学教室〉

ことばの科学に関する知識・理解を深める。言語科学の基礎理論を踏まえ、データを体系的に考察し、必ずしも可視的ではない規則を発見する能力を身につける。脳科学の基礎を理解し、脳における言語情報処理を主眼にして、解析的に検討する能力を身につける。修得した専門的知識と問題解決能力を広く言語と人間の問題に応用する。

〈日本語教育学教室〉

日本語教育学では言語学的な知識はもちろん、言語教育学・社会と言語との関わり・異文化コミュニケーション論・教育工学の基礎を習得する。日本語と日本文化を他言語・他地域との対照において深く理解し、それをグローバル社会の中で伝達していく言語力を身につける。また、人々の移動が増えていく社会的現実の中で、言語教育やそれを取り巻く環境を理解し、対応・行動していける能力を獲得する。

②当該分野以外においても普遍的に有用性を持つ能力

当該分野以外においても普遍的に有効性を持つ能力は以下のとおりです。

a) コミュニケーション能力

自らの考えや疑問を相手に分かり易く伝えるとともに、他者との議論を通して協調しながら作業を行うことができる力。

b) 情報活用能力

多様な情報を収集・分析し、効果的かつ正しく活用することができる力。

c) 総合的問題思考力

持っている知識、能力等を総合的に活用しながら、多角的な視点から物事を思考し、解決すべき問題の本質を見極め、それに取り組むことができる力。

d) 論理的思考力

論理的展開を的確に理解したり、自らの考えを論理的に組み立てたりすることができる力。

e) 能動的学修姿勢

自ら解決すべき問題・課題を見つけ、それに取り組む姿勢を備えることができる力。

f) 倫理観、社会的責任の自覚

高い倫理観を持って、社会に対し主体的に関与する責任を自覚している力。

g) 異なる文化・社会への理解

異なる文化的背景を持つ人・国・地域・社会等への理解を深める力。

.(6)卒業要件

人間社会学科の卒業に必要な単位は 130 単位。内訳は言語科目のうち第二群言語科目 12 単位、およびそれ以外の基礎科目群、教養科目群、基盤科目群 26 単位以上、専門教育科目群からは 74 単位以上。なお専門教育科目の必修の単位数は各分野によって異なるので注意が必要です（本学在学生在が卒業要件を確認する場合には必ず入学年度発行の履修の手引きを参照してください）。

2.教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー:CP）

(1)専門知識における学修成果の確保のための科目編成・教授法・学修方法・学修過程・学修成果の評価の在り方等の基本的考え方

①分野固有の知識・理解及び技術

本学科の DP に基づき、分野横断的な科目を置くと共に、学生の関心に対応できるよう社会学、社会人類学、社会福祉学、心理学、教育学、言語科学、日本語教育学の 7 つの教室を設けています。

1 年次には、単に専門的な知識に飛びつくのではなく、基礎科目、教養科目、基盤科目を通して、様々な分野の基礎知識を修得するとともに、語学の力をつけるために力を注ぐこととなります。現代社会のさまざまな問題に関心を向け、深く物事を考察する能力はそれらの過程を通して自ずと深まっていきます。また、人間社会学科の教室選択は 2 年次進級時であることから、それぞれ進級を希望する分野の導入的な科目や「入門」に属する専門科目を一部履修し、1 年間かけてどちらのコースを専門的に学びたいのか、じっくり検討することとなります。

2 年次進級時にそれぞれの専門分野に所属すると、自らの知的な欲求に基づいて主に専門分野の科目を受講し、それぞれの分野において求められる固有の知的技術を修得していきます。忘れてはならないのは、これらの基礎となる知的技術の修得は 4 年次に執筆することになる卒業論文への準備段階として行われるべきものだという事です。目前の課題に取り組むことで論文を書き上げるための基礎力をつけながら、同時に自分なりの視点を養うことで自分なりに発見の感覚を持てるよう日々取り組んでいくことが望まれます。そのことが卒業論文執筆をより容易にもし、また実り多いものになると信じます。

人間社会学科の各分野においては専門的研究テーマを設定して、興味ある専門分野をより深く学ぶために多様な専門科目を用意し、学生が自ら主体的に課題に取り組めるように自由度の高い選択を可能にするカリキュラムを提供しています。これらの多様な専門科目

から分野ごとに定められた単位を取得することが卒業の要件になっています。できれば4年次に余裕を持って卒論に取り組めるように単位を取得することを推奨します。

4年次にはいよいよ実際に教員の指導のもとに卒業研究論文に取り組むことになります。教員1名に対して学生3名程度の少人数制で、一人ひとりの学生に対して非常に細やかな指導が行われます。評価法としては、期末試験だけでなく、講義の理解度を確認するために、小テストや中間試験を行うことがあります。また、情報を収集・分析する能力や、自分の考えをまとめる能力を評価するためにレポート課題を課す、自分の考えを論理的に表現する能力を評価するために授業中にプレゼンテーションを行うなどして、総合的に評価を判断するのが一般的です。

② 当該分野以外においても普遍的に有用性を持つ能力

人間社会学科の諸分野における学問においては、ひとつの正しい答えが存在するものではなく、むしろ自分で問題を見だし、それを立場の違う人たちに説得的に伝えていくことが求められます。専門教育を通して学ぶ深い精神の蓄積に触れることで、現実の自分とは時間と空間において隔てられているそれらの蓄積の中に、現在の自分自身の存在の根幹につながるような問題・課題を発見、設定し、それに取り組む能動的学習姿勢を身に付けるとともに、これらの問題・課題を研究する過程で論理的思考力を鍛え、情報集中能力を研ぎ澄ませて知識を取捨選択的に取り入れ、それらの知識を踏まえた上で問題解決を探る総合的問題思考力を修得できます。またそれぞれの学問分野における蓄積に対して取捨選択的に対峙していくことによって、過剰な情報にあふれた現代世界のあり方への対応の仕方が身に付くとともに、それぞれの分野で求められている研究を行うことによって、伝統的社会が真理として持っていた意味の枠組みが失われてしまった近代社会において、自らがある程度主体的に再構築すべきものとしての倫理観、社会的責任を自覚することができるようになることをめざしています。

基礎ゼミ、演習などの少人数教育では、特に他者との議論を通して自らの考えを伝え、他者と協調して作業を行うことができるコミュニケーション能力が身に付きます。卒業研究では、これらの能力をすべて発揮して論文を作成します。これが学士課程教育の集大成になります。

(2) 専門教育における学修成果と授業科目の対応表

※別紙参照

(3) 全学共通教育における学修成果の確保のための履修要件・履修指導等の基本的考え方

① 基礎ゼミナール

課題発見から、調査、討論、プレゼンテーションまで、少人数制（24名程度）のクラスに分かれて学問の技法を修得するため、1年次前期に必修としている。コミュニケーション能力、総合的問題思考力、能動的学習姿勢の修得ができます。

② 言語科目

話す・聞く・読む・書くの4つのスキルを、レベル別クラスで反復して学習することによって実践的な英語を習得するために、1年次前期から2年次後期までの実践英語8単位を必修としています。また、未修言語科目のドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語のいずれかを1年次あるいは2年次に履修することを推奨しています。これらの科目によって言語の基礎的な知識を修得するだけでなく、異なる文化・社会を理解できる能力を身につけます。

③ 情報教育

パソコン活用能力だけでなく、情報収集、編集、表現、発信など、課題解決型の授業によるITスキルの実践的能力を身につけるため、1年次前期に「情報リテラシー実践Ⅰ」を必修とし、情報活用能力や情報倫理に関する知識を修得します。

④ 教養科目群・基盤科目群

幅広い教養を身に付け、総合的な思考力や問題解決能力を育成するとともに、多角的な視野を持つことを目的として、合計14単位を取得することを卒業要件にしています（各分野で推奨している科目については、履修の手引きを参照してください）。

(4)年次進行要件

2年次修了判定を以下の基準で行っています。

次の①、②の要件を満たしていること。ただし、2年次を経ずに3年次に進級することはできません。

① 24ヶ月以上在学していること。

② 言語科目 12 単位を含む 44 単位以上を修得していること。